

# 平成 30 年度教育指導者現地研修会報告書

立山町立雄山中学校

教諭 増百 範之

## 1 はじめに

本稿は 8 月 8 日（水）・9 日（木）に行われた、「平成 30 年度北方領土問題青少年・教育指導者現地研修会」の報告である。根室市において同研修会は開催され、全国から 48 名の中学生と 6 名の引率教師、そして 66 名の教育指導者が集った。

開会式の長谷川俊輔 根室市長のお話からは、「北方領土返還運動原点の地」という言葉が印象に残った。市役所や空港、駅前の至る所に「返せ！北方四島！」のスローガンが見られ、市民の悲願となっているということ。また一方では、道路標識や町中の看板にロシア語表記が見られ、一方的にロシアを敵視する状況ではないこと等、町の様子や広報から様々なことを感じる事ができた。

富山県は、北方領土の元島民が北海道に次いで多い県である。県内でも元島民の多い黒部市では、壁新聞の作成、根室市の高校生による講話、元島民の方との交流等、毎年様々な取組を行っており、各小学校には教材用のデータも配布されている。

一方で北方領土を含めた領土問題を授業で扱う際に、教員自身が教科書以上の知識や情報を持ち合わせていないことや、生徒の関心そのものが低いこと等は、深刻な問題であると考えられる。

2016 年 12 月、日露両首脳が山口県で会談を行ったことは記憶に新しい。それ以後も首脳会談は重ねられ、北方四島における共同経済活動や航空機による特別参観等を通じ、北方領土に関して新たな動きが見られるのではないかといった関心が高まっている。このような情勢の中、「北方領土返還運動原点の地」を訪れる機会をいただき、自らの知見を広げられたことは大変ありがたいものであった。この学びを、未来を担う子どもたちに、学校現場を始めとした身近なところから発信し、人々がより一層の関心をもってこの問題に取り組むことができるよう、力を尽くしたい。

## 2 研修内容

### 1 日目

#### (1) 地元高校生による出前講座（根室高等学校 3 年生 平山真悠さんと高岩凜さん）

スライドショーを用いた講座で、北方領土の基礎的情報を得ることができた。根室高等学校には「北方領土根室研究同好会」があり、今回のような研修会への参加や、北方領土へのビザなし訪問等を積極的に行っている。講座では、北方領土に関する情報をクイズ形式で、また領土に関する条約を地図付きで分かりやすく紹介された。ビザなし訪問も写真で紹介され、高校生らしい若い感性と、返還運動を次世代にもつないでいく意識を感じることができた。

#### (2) 北方領土・我が故郷への想い（色丹島出身 得能宏さんの講話）

得能さんは映画「ジョバンニの島」のモデルとなった人物であり、黒部市出身の祖父は明治の中頃に色丹島へ移住した。当時の心情や恐怖を得能さんの言葉からリアル

に感じ取ることができ、元島民としてこの問題を語り継いでいく使命があるという思いを講話の中から強く感じた。ロシアとの関係も、若い世代によって友好的な関係が築かれることを喜ばれる一方で、ロシア側の領土問題に対するロジックの変化、したたかさを指摘されることもあり、長年この問題に取り組んでこられたが故の知見と思慮深さを感じた。

### (3) 北方領土模擬授業（羅臼町立知床未来中学校 千代大輔 教諭）

北方領土教材データの活用について（中標津町立丸山小学校 水口琢磨 教諭）

生徒に対して実際に行った授業を模擬授業として体験した。「北方領土を学ぶ授業」よりも、「北方領土に学ぶ授業」という言葉の通り、平和的な国家間の条約締結のモデルを北方領土の歴史から考えることができるすばらしい授業であった。千代教諭の「正しい事実をどこまで伝えることができるか、いかに自分事として捉えさせるか」という授業への姿勢は、今後も常に意識していきたいと思った。

授業の教材データは、現場の教師として非常にありがたいものである。教材を教師が持ち寄り精選していくことは、よい授業の素材を共有できることであり財産になる。持ち帰った教材データを広く紹介し、活用につなげていきたい。

### (4) 授業構成案づくり

自分を含めた5名の教師で授業構成案を考えた。地理分野の国の領域について扱う部分で、北方領土問題を生徒が主体的に調べる授業構成案を考えることで一致した。詳細は2日目の部分で述べる。

### (5) 夕食交流会（択捉島出身 鈴木咲子さんと会食）

択捉島での当時の生活の様子や現在の心境等について、当時の写真を見せていただきながら語り合うことができた。四島は未だ返還されていない状況で、元島民の高齢化や減少という現状に直面していることへの危機感や、これからの日露関係の改善への願い等について直接聞くことができ、貴重な時間となった。

## 2日目

### (1) 授業構成案づくり

前日に決まったテーマに沿って、具体的な授業構成案を検討した。中学校社会科の課程において北方領土を扱うのは、地理分野の1学年3学期である。まずは北方領土問題について知ること、関心をもつことを目標にすると決めた。その目標解決に当たっては、生徒がそれぞれ調べた内容を共有するジグソー学習という手法を採用することにした。生徒には、「北方領土は日本固有の領土なのに、なぜ日露両国が領有権を主張するのか」という課題を投げかけ、北方領土の「歴史」、「かつての暮らし」、「自然・産業」、「現在の島の様子」の4つを担当を決めて調べることにした。そして各人が調べた情報を共有することで、日露両国の立場や、北方領土について多面的・多角的な思考が促されると考えた。また、様々な立場で調べることで、人権等についても考えるきっかけとなり、後の公民分野の学習にもつながると考えた。この授業の要となるそれぞれの立場の主張や情報の基になるものには、北方四島交流センター(通称ニホロ)の様々な資料や、1日目の水口教諭からいただいた資料を有効に活用していきたい。

## (2) ポスターセッション

他の班の発表では、道路標識の写真を導入に用いたり、他国の地図を導入に用いたりするなど、生徒の興味・関心を惹く様々な切り口を学ぶことができた。マッピングを用いた授業もあり、生徒の意見を引き出す手法として有効だと感じた。

## (3) 北方領土壁新聞（生徒作品）の鑑賞

中学生の作った壁新聞は、北方領土の歴史や自然等、様々な資料を用いた読み応えのあるものであった。特に得能さんの話は多くの生徒の心を打った様子で、「北方領土のこれまでの問題や現状を広めていきたい」という自覚をもって作品づくりを行ったことが感じられた。現地で学ぶことや、実際に体験した人の話を聞くことの重要性を実感した。

## (4) 納沙布岬から北方領土を眺望、北方館・望郷の家視察

濃霧のため直接見ることはできなかったが、ほんの数キロ先の位置にある故郷へ帰ることができない元島民の方々の思いを感じることができた。

## 3 成果と課題

### 成果

#### (1) 北方領土の理解について

四島を訪れることはできなかったが、返還運動原点の地で学ぶことで、基礎的な情報（四島の歴史、自然・産業、返還運動と日露関係）に加え、元島民の方々や根室市、返還運動に関わる人々の思いや熱意に触れることができた。また教科書等で目にする「日本固有の領土」という考え方の由来は、歴史的背景が証明していることを確認できたことにより、授業構成の幅が広がった。

#### (2) 日露関係の展望について

元島民の方々にすれば、不当に追い出されたつらい経験は忘れ難く、ロシアに対してよい感情を抱くのは難しいであろう。実際にロシアの対応に関してシベリアに向き合う必要があることも話されていた。一方で、元島民の方々や根室の若い世代は、それらも踏まえた柔軟な発想と行動を起こそうとしている。また現在四島に住むロシア人の中にも、日本の立場に考えを寄せてくれる人もいる。もとより国際関係は二国間で決着がつくものではない。日露という視点にとらわれることなく、国際的視野をもった思考や行動が重要であり、我々が生徒に育むべき力であることを改めて考えさせられた。

#### (3) 社会科教育において北方領土を扱う重要性について

目と鼻の先にあるにも関わらず、簡単に訪れることができない現実から、この問題の深刻さを改めて感じた。竹島や尖閣諸島の問題と比較すると、実際に住んでいた日本人が不当に追い出されたという事実が、北方領土を扱う際の重要な要素となると思う。これは大人だけでなく、生徒たちの心をも揺り動かす国民的問題であることを、模擬授業や壁新聞から感じた。

## 課題

### (1) 教科書や資料集等の北方領土に関する情報の不十分さについて

普段用いている教科書や資料集では、北方領土の現状の正しい理解を行う際に情報が不足しがちである。特に元島民の生の感情や思いは、やはり直接聞いてこそ胸を打つものがあると考え。また教師自身にも、関心や知見が足りない場合は少なくない。教師自身が関心をもち、富山県が発行している教材等を効果的に使うことが重要である。

### (2) 高等学校段階での北方領土の探究的な学習活動について

今回の研修は中学校の教師・生徒を対象としたものであるが、北方領土問題対策協会の方によると、高等学校の教師・生徒を対象とした活動はほとんど行われていないことが課題とのことである。実際に県内の高等学校の地歴・公民の教師に話を聞くと、特別な研修や授業での扱いはないとのことであった。私見を述べるならば、小中学校の児童生徒の知見では、複雑な知識や国際関係の理解には困難を伴うのも事実であり、高等学校の段階で北方領土を扱うことには意味があると考え。今後の高等学校と大学の接続に伴う探究的な活動や、新しい入試問題の題材として世界的な知見を養うためにも、北方領土の問題は十分に扱うことができると考える。また昨今の高校生に求められる主権者としての意識は、自国の主権や安全保障を考えることにも通じるものがあるだろう。今後の北方領土問題の啓発には、高等学校での取り扱いが重要ではないだろうか。

### (3) 領土や主権について、国民として主体的に考える意識の涵養について

元島民の方々と話をして感じたことは、国民の領土問題に関する感覚の希薄さである。実際に人々が北方領土を追い出されたのは70年以上前のことであり、多くの人々にとって北方領土は最初から占領されているものという感覚であろう。メディアでも竹島や尖閣諸島に比べ、取り上げられる機会も少なく、北方領土問題に積極的に関わろうとする意欲は生じづらいのではないかと考える。しかし領土問題のうち、実際に住んでいた人々が直接的に被害を受け苦しんでいるのは、北方領土だけである。そうした点に注目し、元島民の方々の思いを直接聞くことができれば、この問題に関して国民の心を動かす力が大いにあると感じる。現地で学んだ私たちが学校現場や身近なところでしっかり発信し、広めていくことが重要であろう。

## 4 今後生かしたいこと

教師という立場で、現地で得た知見や資料を活用し、教科書に載っている情報以上の内容を扱っていく。それは生徒や様々な人に北方領土に関心をもってもらい、「日本固有の領土」の返還に向けて国民として何ができるかを考えてもらうためである。そのためには、今回の研修で得た知見を、中学校のみならず他校種の教師とも交流し、広めていく必要があるだろう。そのためにも、今後も北方領土に関心をもち続けていきたいと思う。